

カントの構成的／統制的原理と木村素衛の教育思想 中井正一との比較を通して

戸邊俊哉*, 後藤嘉宏**

Kant's Constitutive / Regulative Principles and Kimura Motomori's Educational Philosophy Exploring Potential Connections with Nakai Masakazu

TOBE Shun'ya, GOTO Yoshihiro

抄録

本稿は探究を肯定する理想主義の意義と問題点を、西田幾多郎・田辺元に学び京都帝国大学で教育学を教えた、京都学派の木村素衛の教育思想から明らかにする。そのために同じ京都学派の中井正一の思想を手がかりとする。

木村は理想主義を、理想にどこまでも近づくために漸進し続けるという意味を含意するカントの統制的原理（抽象的普遍）として捉え、これをエロスと呼んだと考えることができる。しかし統制的原理には理想への未達が定められており、未完結な人間として無力感を生み出す素地にもなる。それに対して木村は完結性を意味するヘーゲルの具体的普遍（カントが理想の取り扱い方として否定した構成的原理）をカントの構想力論の中に見出そうとする。このヘーゲルの具体的普遍が木村のいうアガペと同じ意味になると考えることができる。しかしヘーゲルに対しては循環するだけで漸進しないという意味の発出論批判があった。この問題に対して木村はヘーゲルの具体的普遍にカントの統制的原理を読み込もうとする。このような統制的原理・抽象的普遍と構成的原理・具体的普遍を相補的に使うことが、木村が表現愛と呼称したものであると考えることができる。また、その対象が未熟者である際に教育愛になると木村は指摘した。

ただし木村は、エロスとアガペの相補性を「アガペがエロスを「包む」」としており、そこに西田の思想における発出論の影響と問題点があった。この問題は京都学派の中井正一の目的なき目的論によって乗り越え可能であることを本稿では指摘した。また、エロスとアガペの議論の延長線上に、田辺が晩年にマラルメとヴァレリーを論じた理由も見出せる可能性もあるということを、マラルメに影響を受けたヴァレリーの「美的無限」から論じ、今後の可能性を指摘した。

Abstract

This paper clarifies the significance and challenges of idealism, affirming inquiry, with reference to the educational philosophy of Kimura Motomori in the Kyoto School.

Kimura, who taught Studies of Education at Kyoto Imperial University, regarded Kant's regulative principle—implying a continuous approach towards ideals—as Eros. However, the regulative principle encompasses an aspect of incompleteness, inducing a sense of helplessness, as an unfinished individual defines the meaning of continually striving to get as close to the ideal as possible, and unreachable it. This unreachable leads to a feeling of helplessness, therefore Kimura attempts to resolve this using Hegel's concrete universals (the constitutive principle that Kant rejected as an approach to ideals), signifying completeness, which he calls agape. However, a critique of Hegel argued that it only circulates and does not progress. In response, Kimura tries to integrate Kant's regulative principle into Hegel's concrete universals. The complementary use of the regulative principle and constitutive principle is termed “Hyougenai”. Kimura also pointed out that this becomes “Kyouikuai” when the target is an immature individual.

Nonetheless, Kimura stated the complementarity of Eros and Agape as “Agape envelops Eros”. This expression encountered issues with the influence of completeness in Nishida's

theory. This paper points out that this problem can be overcome by the theory of “purposiveness without a purpose” proposed by Nakai Masakazu of the Kyoto School. Furthermore, this paper suggests that the reason for Tanabe Hajime’s discussion of Mallarmé in his later years can be found as an extension of the discussion of Eros and Agape, based on Valéry’s “Aesthetic Infinity”, which was influenced by Mallarmé.

* 筑波大学大学院図書館情報メディア研究科博士後期課程
Doctoral Program
Graduate School of Library, Information and Media Studies
University of Tsukuba

** 筑波大学図書館情報メディア系
Institute of Library, Information and Media Science
University of Tsukuba

1. はじめに

「ウサギとカメ」の物語は、概してウサギとカメが目的地にどちらが早く辿りつくかを競う話である。そして、自らの足の速さに慢心し途中で寝てしまったウサギに対し、カメは努力を怠ることなく勝利への向上心・探求心を持ち続けた結果として勝利をおさめることになる、そこに様々な教訓を見出すことになる。

しかし、現実にはこのような理想主義的な向上心・探求心の教訓を手放して語ることはできるだろうか。例えば「ウサギとカメ」の物語でウサギが慢心しなかったとき、カメが向上心・探求心を強く持ち続けたとしても、負けることは目に見えている。それは努力したけれども、結果を得ることができなかったということになる。その場合、努力をしたという事実さえ知らなければ、少しの評価もされることはないであろう。向上心・探求心は人類の進歩という意味で必須なものであるにもかかわらず、それがこのような位置づけにすぎないのであれば、到達できないものへ向上心・探求心を持ち続けることが自信喪失、無力感などへと陥ってしまう原因にもならないだろうか。そして、この問題に対処するためにカメの努力や個性もまた独自のものとして認めていこうという手法があったとして、そこに躓きの石はないであろうか。

2. 研究目的及び研究手法

向上心や探究心、つまり理想となる目標・目的（目当て）をたててそれに向けて探究・向上していくという理想主義は、特に教育という領域においてなくてはならないものである。では向上心を涵養することを残したまま、その目的への未達という現実的な問題をどのように考えればよいのか。この問題に 대응しようとしたのが京都学派で教育学を教えた木村素衛¹である。木村は『教育学の根本問題』で理想主義に立脚する教育学の問題点について、「人間が一方に於て達成すべき理念をもちながら現実にはどうしてもそれを達成出来ない自己矛盾的な存在として自らの本質を暴露することである。それが一般にエロスの立場²であると述べ、それを解決するために「エロスを包むアガペの世界へ次元を展開してエロスとアガペの聯關から表現愛を説いた」³と述べている。つまり木村は、教育学における向上心・探求心というエロスの立場が引き起こす問題（到達できない目標を掲げなおそれを求め続けること）と、それを解決するためにアガペの立場が必要であり、さらにそのエロスとアガペの連關が重要となると述べるのである。

そもそもアガペやエロスとは何かというとき、例えば京都学派の一人である三木清は、アガペを「神の愛」⁴、一方のエロスは「不完全なる存在のうちにある完全なる存在への希求」⁵・「理想に対する愛（プラトンのエロス）」⁶と述べている。つまりアガペ的なものが神そのものに関する議論、エロスのようなものが神に対する向上心に関する議論（完全なる存在を神とすれば）ということがわかる。つまり、もともとは次元の異なるエロスとアガペを関連づけて木村は論じているということになる。

この次元の異なる対象を関連づけて論じる背景として、木村が「4年前から第一批判を読み初めて、四五回もくり返して来ている」⁷と述べているように、卒業論文でカントの研究に取り組み、その一部を『哲学研究』（京都哲学会）に投稿した際の論文のタイトルが「カントの NOUMENA と先験的自由に就て」（1923年）であったことに注目したい。つまりプラトンを批判的に受容してイデー（Idee）の理論へと展開したとされる⁸カントの理念の取り扱い方法が、エロスとアガペの議論に関係しているのではないかという問題意識である（木村はカント著作集の翻訳も分担⁹している）。

ただし、木村は学生時代にヘーゲルについても研究し、それを大学2回生のときに師である西田幾多郎に提出（のちに論文「含蓄から顯現へ」（1925年）として『思想』に掲載）している¹⁰。その後、論文「カントにおける具体的普遍」（1926年）、「ヘーゲルにおける藝術美のイデー」（1931年）を『思想』に載せている。具体的普遍はヘーゲルに見いだされる概念であり、「カントにおける具体的普遍」はいわば＜カントにおけるヘーゲル＞ということであり、木村はカントとヘーゲルを比較していることになる。このため本稿では、カントとヘーゲルの理念の取り扱い方という観点から考察するために、木村が複数回読んだという、カントの『純粹理性批判』において理念の取り扱い方として提起された統制的原理と構成的原理（先んじて言えば理念を、概してカントは統制的に、ヘーゲルは構成的に取り扱う）に着目する。

次に木村の先行研究と本稿との関係について述べる。小田部胤久は木村のエロスとアガペの議論について、木村が発出論（先んじて言えば完結性）を批判しつつも結局は批判しきれていないと指摘している¹¹。しかし、その指摘のなかにカントの理念との関連性は明確に述べられていない¹²。よって本稿は向上心の教育的意義の可能性を見出すために、木村のエロスとアガペの概念を手がかりに、それをカントの議論と関係づけて考察する。また木村の発出論の問題については、西田幾多郎のあとに京都学派で中核となった田辺元の種の論理を手がかりと

して木村の問題点を明らかにし、その発出論の問題と格闘し続けた京都学派の中井正一の思想からその解決の糸口の方向性を提起する。

3. カントの統制的原理と構成的原理の問題

3.1. エロスの人間—統制的原理とその問題点

理想となる目標・目的（目当て）をたててそれに向けて探究・向上していくという理想主義教育と未達の問題について、それが生々しく現れる競争の観点から考え直してみたい。

ウサギとカメの競争では先に到着することが目標・目的であれば、負ければ勝利に至ることはできなくなる。このような現実（此岸）における確実な未達の問題への対処方法として素朴に考えられるのが「勝ち負けのない競争」である。ただし、勝ち負けをなくしてしまえば、競争それ自体が意味をなさなくなる。

そこで競争の意義を認めつつ未達の問題へと対処するために「勝利だけが負けのない競争」という手法が思い浮かぶ。なぜなら、競争は勝負をつけることだという意味では誰もが勝つことを望んでいる。その状況は競争に参加したすべての人間が勝利を求めて競争に臨んでおり、皆が“勝つ（勝利）”という理念を共有しているという意味で、対立ではない状態が成立している。よって、各自が勝つことを望むという意味で競争の意義があり、勝利という理念を皆が目標として共有するという意味においては、それに向けて皆が一致団結している状態として考えることが出来る。これは勝利が経験できる現実（此岸）にあるものではなく、経験できない彼岸にある理念（Idee イデー）となすということを意味する。

さらに皆が目標として共有している勝利という理念は、競争であるにもかかわらず平和の理念としても見出すことができるようになる。もちろん、これは現実ではなく理念においての平和にすぎないから、その理念に到達することはできない。しかし、現実ではなく理念であればこそ、限られた人しか勝者になれないという現実の不可能性に直面したときであっても、理念の次元における勝利という名の平和へ向けて我々の行為が統制（統整もしくは規制とも訳される *regulative* を意味）される。到達はできなくともそこにどこまでも近づくことができる探究の目標となる。換言すれば、理念としての平和を永遠に求め続けるために競争の意義を認めることができることになる。永遠にそのように考え続けられたとき、現実的な勝利や敗北は平和へのプロセスにすぎず、理念に対してそれぞれの人が持つ多様な特徴や個性が示され

たと受け止めることができるようになると考えることもできる。

この思想はカントが『純粹理性批判』で明らかにした理念の積極的な使用法である。カントは理念について次のように述べる。「そこで私はこう主張する、—先験的理念は決して構成的には使用されぬ、それだからこれによって対象の概念は与えられない、もし理念をこのように解するならば、理念はまったく詭弁的（弁証的）概念にすぎなくなる、と。ところが先験的理念は、統整的にも使用されるのである。この統整的使用は、悟性を或る目標に向わせるに必須の、かつすぐれた使用である。悟性の一切の規則はこの目標を望み見て、方向を指示する線に沿いつつ、一点に合する、この点が即ち理念（*focus imaginarius* 虚焦点〔即ち、光がそこから発出するかのように見える鏡面の想像的焦点〕）にほかならない。かかる『点』は、まったく可能的経験の限界のそとにあり、従って悟性概念が実際にこの点から発出するのではないが、しかし悟性概念に最大の拡張と最大の統一とを同時に与えるのである」¹³。このように、此岸にある現実的な未達の問題を彼岸にある理念における未達の問題となすことで、人類全体が未達存在であるからこそ、皆で向上し探究し続けることの意義を語るができるようになる。

ただし、カントはこの統制的原理について警告もしている。「ところが、ここから錯覚が出じるのである、つまり方向を指示するこれらの線が、あたかも経験的に可能な対象そのものの領域外にある対象から発出したかのような錯覚である」¹⁴。これは、彼岸にあって経験できない理念を“あるかのように”使うことは許されるが、人間の認識の限界を超えて彼岸に“ある”と確信＝実体化することへの戒めである（なおこの警告を無視してできあがる概念が、中井が批判する抽象的実体概念である。そしてこの概念が引き起こす結果は、理想を探究し続けることではなく、現実と理想が一致するの可否かという二者択一を求めることになり、破局的なものとなる。また、人々の個性も消え去る。）。)

このような細心の注意を払った理念の積極的な使用方法はカントの永遠平和論にも見出すことができる。そこでは永遠平和を「たとえ限りなく前進しながら近づくしかないとしても、公法の状態を実現することが義務であり、実現の希望にも根拠があるとすると、これまで誤ってそう呼ばれてきた平和条約（これは実は休戦にすぎない）のあとに続く真の永遠平和は、決して空虚な理念ではなくて、われわれに課せられた課題である。この課題は次第に解決され、その目標に（同じ量の進歩が起こる

期間は、おそらく次第に短くなるから）たえず接近することになろう」¹⁵と述べている。

カントが示したこの統制的原理は理想が北極星のように歩むべき道標となることで、そこにどこまでも近づける（向上・探求する）ことを肯定する考え方であるといえる。そして、カントも述べているように、その理想は可能的経験の限界のそとにあるということ、「漸近的にどこまでも接近することはできるが、しかしこれに完全に到達することは不可能」¹⁶な理念である。つまり、理念に向けて不断の漸進が可能になり、かつ各々の活動に独自の意味を見出すことはできるが、人類の誰もが到達は不可能となる原理ということである。しかし、不可能であるからこそ、人類にとって当為の理念となる。

このカントの統制的原理が木村の意味するエロスと交差することを本稿では指摘したい¹⁷。木村は教育について「通常教育愛はエロスの的に考へられてゐるが、これは教育が引上げるといふ言語学的意味をもつてゐることからして向上愛と考へられるのも當然である。實際、教育において向上性への愛を缺くことは出来ない」¹⁸と述べている。ここでエロスは向上心を意味する概念であることが判明する。そして、木村はそのエロスを次のように表現する。「エロスの立場に於ても不完全性が十分に注目されなければならない。アイデアの追求といふことを本質的性格とする人間存在に於てはその現実が常にアイデアに到達してゐないことが豫想される。換言すればそのやうな存在は常に不完全であり、また完結性をもたないことを意味する」¹⁹。つまり教育における向上心は木村にとってエロスのであり、そのエロスは目標となる理念への未達が人間全体に対して予想されると木村は述べているのである。このように木村のエロスはカントの統制的原理に影響を受けている²⁰。

しかし、ここで重要なのが木村はカントを単純に肯定しているわけではないという点である。木村はこのやうな人類の理念への未達という観点からすれば、人間は常にその価値ある理念に到達できないという意味で悪人²¹になると述べて、「エロスの立場はそこに深刻な問題に出會ふわけである。本来絶対完全な理念に関係せしめられてそれとも一致を深い念願とすることが人間の本質的使命であるにかかはらず、人間が罪惡的存在であるといふ反面のために、その念願は理想主義の立場に於てはどうしても解決されない」²²と述べている。ここで木村はカントに倣いつつも、カントの未達が引き起こす問題（本稿の問題意識でいえば自信喪失、無力感）を問題視して乗り越えていこうとする思想を求めている。そして、その論理がアガベの論理ということになる。そのカントを

乗り越えていこうとする方向がわかるのが木村の「カントにおける具体的普遍」論文である。

3.2. 構想力の論理とアガベ—あるべかりしカントの思想方向としての具体的普遍（カントからヘーゲルへ）

「カントにおける具体的普遍」の冒頭、「ヘーゲルに於てその哲学の中心概念として高められ現はにされて来た具体的普遍性の特徴が、如何にカントの中に含意せられてゐたか」²³と論文の意図が示される。そしてヘーゲルの具体的普遍に対してカントが理解していたものが抽象的普遍であるとする。ただし木村は、カントの思想の中に具体的普遍がまったくなかったわけではなく、カントの思想が抽象的普遍にもとづいていたとしても、その思想の中に具体的普遍へと至るものも見出されるというのである。そしてカントの中にある具体的普遍へと至る思想とは（三木の著書のタイトルとしても冠される）「構想力」であるというのである。

それでは抽象的普遍と具体的普遍とはどのようなものであろうか。木村は抽象的普遍が「包摂」、具体的普遍が「綜合」と述べる²⁴が、この違いをわかりやすい例を用いて述べているのが中井である。そこでは抽象的普遍²⁵の例として「桜の実と牛肉は赤い水気のある物体である」²⁶という判断を述べている。この判断について考えてみると、桜の実と牛肉は各々多様な特徴をもっているが、ここではその多様な特徴が消去され抽象化されて赤い水気のある物体という概念ができています。もちろん消去といっても、木村が指摘するように実際には「物体」という中にその特徴が「包摂」されている。よって包摂＝消去という観点からすれば経験できない概念による包摂判断、「桜の実と牛肉は物自体である（桜の実と牛肉は物自体に包摂される）」と述べても論理的に齟齬はない。このように包摂されていった結果出来上がる概念が抽象的普遍である（この物自体について、カントの警告を無視して実体化した場合が中井の批判する抽象的实体である）。

この例を素朴な形で説明するなら、ある集団の人たちを「あなたたちはいい人だ」と表現することについて考えたい。「いい人」と言われて個々人はどう思うであろう。私のことをよくわかっていないなどと思う人もいのではないだろうか。それはこの表現が抽象的普遍の考えからきているからである。個々人にある様々な特徴（優しい、厳しい、話を聞いてくれる…）をただ「いい人」とだけ言いきっているのであるから、それぞれの特徴が全て包摂（消去）されている。だから聞く方からすれば「あなたたちは物体だ」と言われているのと変わりはないと

もいえる²⁷。

この抽象的普遍の概念にカントが拘ったと木村が述べるように²⁸、この論理は理念を彼岸においてそこに向けて行為が統制されるという統制的原理の思考法と軌を一にしている。

ではもう一方の「総合」たる具体的普遍とは何か。中井はここでカッシーラーを参考に「関数」に着目する²⁹。例えば $y=3x+2$ という関数をみたとき、関数は x が1のときであれ、2のときであれ、どんな具体的な数値もあますことなく一つの姿において示している。ここでは消去（包摂）されるものなく様々な要素が全体において総合されている。さきの集団における個人への評価方法でいえば、個人はパラメーターのように個性が全体において表現されることになる。

このような消去されることなき具体的普遍の思想、つまり総合判断を木村はカントの構想力のどこに見出そうとしたのだろうか。それが図式論である³⁰。この図式論³¹について、〈ネコ〉を例にして考えてみたい。ある日、道を歩いていたら1匹の白い長毛のタヌキみたいな大きいネコに出くわしたとしよう。そのあと今度は黒い短毛の歩みもおぼつかない子ネコに出くわしたとする。そうすると、2匹のネコに出会ったことになる。素朴な日常であるが驚くべきことがここで起きている。白い長毛の大きなネコと黒い短毛の子ネコは外見だけでいえば全く異なるものであるにもかかわらず、二匹のネコを同じくネコと呼んでいる。この判断は抽象的普遍の概念では不可能である（私は私のことをネコとは思わない（包摂しない））。これが可能になるには目の前に現れている「ネコ」のことを形像（要素ないし部分）、他方、具体的普遍の〈ネコ〉（関数ないし全体）を図式とする考えで可能になる。このように木村はカントの構想力の図式論に具体的普遍の可能性を見出したと考えることができる。そして具体的普遍の論理は、統制的原理とは異なり、各々が自己を余すことなく満たして表示できるという完結性を備えたことを意味する構成的原理³²となる。さらに、完結性を備えているのであれば、そこには価値や当為もない。木村は根本的にはこのような当為のない完結性、換言すればそれ自体を包む論理をアガベと呼ぶ³³。

ここまで明らかにしたことをまとめると、エロスは統制的原理（もしくは抽象的普遍）、アガベは構成的原理（もしくはヘーゲルの具体的普遍）ということになる³⁴。そして、本稿2.で述べた三木のエロスとアガベの意味と比較してみても、エロスは神（彼岸）への向上心を意味したわけであった点からすればカントの統制的原理とつながる。また、アガベは神の愛を意味しており、その

神は完結した存在であるから、完結という意味においてカントの構成的原理、そしてヘーゲルの具体的普遍と意味を同じくするものと考えることができる。

しかし、ここで三木と同じ疑問が生じる。「具體的普遍の概念は果して完全に個性の基礎付けをなし得るであらうか」³⁵という疑問である。ここで木村も、アガベは未完結なエロスがあって求められるものであり、「エロスがなければアガベはない」³⁶、つまりエロスとアガベは未完結と完結という意味で対立する概念であるにもかかわらず、それを相補うものであるという。なぜ対立するものを相補うように見る必要があったのか、そこに木村のアガベの問題点となる発出論が読み取れる。

3.3 表現愛としての教育—発出論に抗うためのカントの統制的原理（ヘーゲルからカントへ）

木村は『教育学の根本問題』において教育は表現愛がその対象を未熟者にもつ場合に教育愛になると述べるように、教育は表現愛でなければならないという。では表現愛は何かというと、エロスとアガベの総合であるという。そしてその総合の形は「エロスの立場に立つて人間を過程的なものとしてみるのではなくて、その過程的なものに於ける缺如性を包越する立場に立つてでなければならない」³⁷という。しかし、ここで疑問が生じる。そもそも向上心・探求心を意味するエロスに問題があるのであれば、エロスを否定してアガベの考えへと転換してしまえばいいはずである。そのようにできないのには、エロスには簡単に捨て去れない教育的意義があるからというだけでなく、アガベそれ自体が抱える問題があるからである。それが小田部も指摘する発出論の問題である。

発出論が意味するものはカントの統制的原理の実体化への警告と同じであり、ここでは発出論批判にこだわった中井の表現を使いたい。中井は発出論（実体概念³⁸）を「一度ピストルより発射されたら永遠に飛行をつづける弾丸」³⁹と表現する。この表現は一見するとわかりにくい、これを理解する上で重要なのが、ピストルから発射された弾丸は現実には永遠に飛行できないという事実である。普通に考えれば発射された弾丸の速度は最後にゼロになるまで変化し続けるはずである。にもかかわらず中井は永遠に飛行をつづけると表現する。つまり中井は発出論を最初と最後、出発と到着、前提と結論、内と外がイコールで結ばれている状態、換言すれば閉じて完結した円環になっているとしたいのである。

ここで木村のアガベの理論を確認してみると、アガベは具体的普遍や構成的原理つまり完結性を意味していた。そして、それが完結性を意味しているのであれば、

そこに変化はないということになりかねない。つまり、アガペもまた出発即到着といったような閉じた円環であるが故に発展の芽は見られない発出論に属する恐れがある。

このような状態を教育の領域におきかえて表現してみよう。エロスには未完結であり続けるという統制的原理の特徴がある。それは未完結だからこそ当為に向けて仮無限的に向上・探求（変化）し続けることができるという正の側面と、そういった当為に到達できないという意味で限界が定められている人間（換言すれば人間は悪として定められている）という負の側面があった。この欠点を補うために、アガペの論理が要請された。アガペには完結を表現できる具体的普遍（構成的原理）の特徴があり、それは個々の特徴を完結した形で表現できた当為のない世界という意味で、それ自身の個性を余すことなく表示できる正の側面がある。ただし、それは大本の根拠となるものの一つの形に過ぎないという意味にもなりえ、その意味では個性・変化のない状態となる。

このような発出論から脱する方法について、木村は「ヘーゲルにおける藝術美のイデー」でそれを論じている。ヘーゲルをタイトルに冠するこの論文で試みられるのは、先の「カントにおける具体的普遍」論文でカントにヘーゲルの具体的普遍の素地を見出そうとしているのとは逆のことである。木村は「ヘーゲルに発出論を帰することはそれほどに疑ふべからざる定説でなければならぬのであらうか」⁴⁰と疑問を呈し、ヘーゲルを発出論的傾向から解放⁴¹するために、ここではヘーゲルにカントの統制的原理を読み込もうとする。

そして次のように考察する。「内と外との十全なる一致が美のイデアールであるとヘーゲルが云つても、実はいかかるイデアールは我々の芸術活動を導く無限に遠き光であるに過ぎない。統制的な理想原理である。この意味に於て一切の作品は不完全である。と同時に一切の作品は独特にして唯一の美的価値を有する一つの完成態である」⁴²。これが意味しているのは木村が統制的かつ構成的な論理の存立を目指しているということになる（なお、イデアールとイデーの違いについて岩城見一は「ヘーゲルは、美を「理念」（Idee）の実在としての「理想」（Ideal）と規定」⁴³したと述べている。本稿における統制的／構成的が Idee / Ideal という見方と軌を一にすることに違和感はない）。

このようなエロス（統制的原理・抽象的普遍）かつアガペ（構成的原理・具体的普遍）な原理を具体的に考えるにあたり、例えば出版物について考えてみたい。校了して出版された文書があったとすれば、それはその時点で完成したものである。けれども我々はその文書を見直

してしまいエロスの向上させようとしてしまう。けれども校了・出版されてしまっているわけであるから、回収されようが何をしようがそこでは絶対に修正できない（到達できない）状態が生まれる。けれども、そこでアガペの理論が適応されれば、その校了した文書は、その時点で欠点があったとしても、その欠点があるから次の飛躍への踏み台になり得る。つまり校了した欠点のある文書は「完成への永遠の過程であるが、個々に於ては完結してゐる」⁴⁴（前者が統制的原理のエロス、後者が構成的原理のアガペ）となる。

このようなあり方を木村は『教育学の根本問題』において「表現的生命が本来理念の完全な実現を要求するものであるとすれば、その実現はエロスの立場では遂げられない。アガペによつてはじめてそれは充たされる。しかもアガペはエロスを媒介としなければ成立し得ない」⁴⁵と述べている。つまり、統制的なエロスと構成的なアガペは凹凸のように、お互いの欠点を相補うことで十全にその意義を発揮できるということが意味されている。それはエロスにおける当為への未達の問題をアガペの完結性の論理で補い、アガペにおける発出論をエロスの当為への向上・探求が補うという弁証法的な形が導きだされるのである。

3.4 表現愛と絶対無の問題—種の論理と場所の論理のはざまで

これで木村の表現愛は発出論を免れたのであろうか。この点については小田部の発出論に関する指摘を参考に、それを本稿の焦点である統制的原理と構成的原理の観点から考察していく。

小田部は「発出論的傾向をけっして免れてはいない、というべきであらう」⁴⁶と指摘する。なぜ木村の表現愛が発出論を免れていないのか、ここで問題になるのが木村のエロスとアガペの位置関係となる。木村はそれを「エロスを包むアガペの世界へ次元を展開してエロスとアガペの聯關から表現愛を説いた」⁴⁷と述べている。たしかに、この表現を見る限り、少なくとも木村の中ではエロスがアガペによって包まれる、つまりエロスもアガペの一部に過ぎないということになる。さらに「エロスの価値が無であるとすれば、このような無は実は対象化せられた無でありその意味で相対的無である。アガペこそ絶対的無であつて一切の根底にある最後の原理である」⁴⁸とも述べている。ただし、その一方で「アガペが自己の内面に於て自己ならぬエロスによつて自己否定的媒介をなしてゐるのである」⁴⁹とも述べており、木村の理論が単純に発出論かどうか注意深く考えることが求め

られる。

ここで注目すべきなのが、小田部が、木村の議論に田辺元の種の論理の影響が強くと述べて⁵⁰、田辺の立場にとどまれば木村に発出論的傾向は全く認められないにもかかわらず、最後に（筆者：西田的な）包むことへと踏み出すと一転して発出論になると指摘していることである⁵¹。本稿ではこの指摘の意味を具体的普遍的観点から明らかにしたい。

田辺の種の論理とは個別具体的なもの（個）と普遍的なもの（類）を媒介するもの（種・特殊）というように、具体と普遍を媒介するものとしての種に注目する論理である。ここでは田辺に直接学んだ辻村公一の、田辺についての説明を参考にする。辻村は、論理の本質は「推論」にあるという。例えばEはAであるという判断があったとして、それは形式論理からすれば、まだEがAであることの理由が明らかにされていない非合理的な状態であると指摘する。そして「EはAであるという判断は、その直接的統一性を否定され、BはAであり、EはBである、故にEはAである、という推論の形に展開され、媒介された統一を示さねばならない。すなわち、「である」という繫辞は、EとAとの間に位置するいわゆる中概念Bとして展開するとともに、それによって媒介された統一を結論において示す」⁵²が必要であると述べる。ここで示されるBが種であり、BはEとAの両方を同時に含む全体概念になりうるという意味で具体的普遍や図式と軌を一にすることがわかる。

そして、種が否定を意味することもすでに示されている。なぜなら、非合理的な直接的統一であるただの「EはAである」という判断が否定され、「BはAであり、EはBである」という判断が媒介することで「EはAである」が成立するのであるから、種であるBは直接的統一の否定が意味されることになる。ただし、これを別の側面からみれば、非合理的な直接的統一がなければ、種（否定）は起動しないという意味にもなる。つまり、非合理的な直接的統一もまた論理の実現のためにはその存在が要請されるということになる。そして、この非合理的な直接的統一の一つに「無の場所」があるというのである⁵³。

ここまでの辻村の説明から見た田辺の論理を振り返れば、木村のエロスにおける未達存在としての人間（非合理的な存在）とそれを補うアガベという視点が種の論理と軌を一にすることがわかる。しかし、田辺の媒介はあくまで非合理的なものへの否定の“働き”（そのための非合理的なものの肯定）、つまり動的な状態を意味するものである。一方、木村の包むという表現に否定もしく

は動的な状態が含意されているとは理解し難い。もし絶対無として表現するのであれば、辻村がいうように⁵⁴、それは働きとしての絶対無であり、（筆者：包むものとしての）西田的な絶対無の場所ではない。

そして包むというように考えれば、それはエロスの向上心をもって探究しても、それは最初から決まっている結論になるということになりはしないだろうか。これを具体的な事象におきかえれば、さきの出版物の例では、欠点のある文書を作ってしまったことも、既に予定されていたことであり、いくら努力しても免れることのできないことだったのだということになる。それは当為へ向上することそれ自体もまた否定されてしまわないだろうか。この点については、小田部も「アガベ」によってその「うちに」「包まれる」のであるから、「絶対無」とってはいかなる外部も存在しない⁵⁵と述べておりその妥当性が垣間見える。

もちろん、木村の理論がたとえ発出論であったとしても決して無価値であるわけではない。人知の及ばないもの（彼岸）によって決められたことだから、たとえ此岸において何も為すことができなかったとしても（当為に到達できない人間の罪惡も）許されるという状況が要請されるときもある。例えば木村が生きた戦時下にあっては今より死は身近なものであり、死が免れない状況に直面することも多かったはずである。そこでの死は理不尽に直面する非合理的なものであったはずである。そのような状況で、発出論としての表現愛は彼の世への信仰を可能にする。それは岸本英夫がいうように「武士道は死ぬこととみつけたり」という覚悟、「死を見ること帰するが如し」という態度などの現代人が得難い死生観⁵⁶を得られることになるかもしれない。または、近代的な際限のない欲望の肯定とそれによる自然破壊といったものを押しとどめる考え方にもなりえるかもしれない。

しかし、本稿で問題にすべきは木村が「ヘーゲルにおける藝術美のイデー」で発出論を免れようとしていたという点である。この点について小田部は、そもそも木村が発出論を発出論でないとしなした理由はなんであろうかと問題提起する。そして、木村が無の場所とよんでいるものが田辺の媒介の論理を持っているにもかかわらず、なぜかこの媒介原理を「自己自身を限定する」と西田の場所の論理の言葉を持って表現していると指摘する⁵⁷。ここから考えられる仮説は、理論としては発出論を否定的に乗り越えようとしているのに、表現として発出論になったのではないだろうかという問いである⁵⁸。換言すれば、西田を批判的に乗り越えていこうとする態度、そこから導き出される表現の仕方こそが、表現愛に基づく

教育愛には求められるのではないだろうか。

3.5. 中井正一の「目的なき合目的性」—統制的かつ構成的であるために

それでは発出論にならないような思考法や表現には何があるのでしょうか。ここで木村と同じく田辺元を師の一人とする、国立国会図書館初代副館長を務めた中井の発出論の乗り越え策の可能性に向かうことを提起したい。木村と中井の両名はどちらも美を研究対象としている点、田辺の思想に影響を受け、それを肯定的に受け止めている点は近似している。しかし、その田辺が西田批判を公言した点についての態度は異なる。中井が田辺と同じく西田批判に拘っていたと語られるのに対して、木村が中井と軌を一にするような態度をとったと語られることは寡聞にして知らない。そして西田の発出論への批判を公言した中井は、木村が「包む」と表現したものを「関心なき関心」ないし「目的なき目的」と表現⁵⁹していると考えられる（なお木村が「目的なき合目的性」を知らなかったわけではなく、「観ることと作ること」においてカントの目的なき合目的性に具体的普遍を絡めて言及している⁶⁰）。

これら「関心なき関心」「目的なき目的」に通じる「目的なき合目的性」は、もともと中井の美学上の恩師深田康算が日本最初の邦訳を試みつつ、中座したカント『判断力批判』における、美の特徴を示す要諦の言葉である。では中井はこの言葉を発出論に対してどのように使用したのだろうか。まず中井が具体的普遍を関数に見出したとすれば、そこには木村のアガペとおなじように完結性の問題があることになる。このような具体的普遍としての関数の問題点について河本英夫は「数学的に定式化された関数は、固定化された関数そのものによって、自己超越が不可能であるという点にその特質を持つ」⁶¹と指摘するとともに「関数 $F(x, y)$ の中で、 x と y は分析的には無限の任意の値をとりうるが、常に一義的に限定されていることによって特徴づけられている。その限定性の範囲の中での可変性が、たとえ無限大、無限小、無限限ということが可能になるものであっても、閉鎖的な系をなすものであることに変わりはない」⁶²と述べている。つまり関数は決まった動きしか取らないということになり、これでは中井が批判した永遠に飛行する弾丸と同じように完結していることになる（関数が発出論であるという指摘に対してはカオス理論、初期値鋭敏性によってそもそも決定されていても実際には予測できないという批判も可能かもしれない。しかし中井の時代にカオス理論は成立していない。）。

そこで中井は具体的普遍としての関数の可能性を残しつつ発出論から解放するために、関数ではなく機能という言葉を使い（なお、中井はカッシーラー版のカント全集を愛用し、なおかつカッシーラーの『実体概念から関数概念へ』の影響も強く受けていたが、カッシーラーの「関数概念」の *Funktion* は「関数」とともに「機能」も意味する）、そこに三木の技術論における手段＝目的図式を取り込む。三木は「一定の關係に於いて目的であるものも一層高次の目的に對しては手段となる」⁶³というように、目的は達成（完結）されたら終わりではなく新たな目的のための手段（ドイツ語で手段は *Mittel*）へと転化するという、つまり目的には終わりがなく未完結と考える。これを中井は *vermitteln* の *Mittel*⁶⁴と言い換えるが、つまり目的を達成するためには手段を必要とするが、その手段はもともと目的であるという意味の媒介（往復運動）によって成立するということになる。

このような考え方は木村のアガペとエロスの連関の仕方と同じであると考えてもおかしくはないであろう。つまり、木村的な表現に言い換えれば、機能（関数）は「完成への永遠の過程であるが、その時点に於ては完結している」ということになる。問題はその後である。中井は、その往復運動たる手段＝目的図式を意味する *Mittel* を否定の媒介もしくは無と表現するだけで、「包む」といったような発出を想起させる言葉を用いない。なぜ中井はここで発出論へと赴かずにとどまることができたのか。ここで目的なき合目的性の思想が重要な意味を持つ。なぜなら「包む」というのであれば何か最終的な目的がある、つまりたとえ「完成への永遠の過程である」と考えたとしても、それは目的ある目的論（2パラグラフ前の「関心なき関心」「目的なき目的」「目的なき合目的性」の逆の）の考えへと転化するからである。永遠のプロセスを辿るというのであれば、暫定的な目的はあったとしても、最終目的は何であるかを有限な人間が確実にいうことは不可能なはずである。

このような問題を西田と田辺の対立でいえば、西田は田辺のことをカント的であると批判的に評し⁶⁵つつ、自らはヘーゲルの立場を徹底すべきと述べている⁶⁶。一方の田辺は「私はいつたい自分がカント学徒と称せらるべき者であるかどうかを知らない。併しカントの人格と思想とに対して懐く崇敬の念に於ては、自らカント学徒を以て居る人に必ずしも多く譲らないつもりである。実に私は私の思索生活に於て日としてカントの教を感謝しないことはない」と云つてもよい⁶⁷と述べ、現にありしカントよりも「あるべかりしカント」⁶⁸を求めていると述べている。つまり西田の発想に影響をうけることで木

村はヘーゲルの傾向となり、一方で中井は深田の遺訓（「西田君の *wirbel* はね…どうも」⁶⁹）もあり、田辺と軌を一にするカント的な傾向となったともいえる。そう言った意味も含め、目的なき目的論は発出論を拒否し続けるために重要な意味を持つと言え、中井の実践にその可能性を見出すことができる。

4. まとめと今後の課題—田辺元の『マラルメ覚書』へむけて

本稿では向上心の教育的意義を認めたくえて、その目的への未達という現実的な問題をどのように考えればよいのかということを考察した。木村素衛の表現愛、エロスとアガベの連関からみれば、それは抽象的普遍（向上心）と具体的普遍（個性重視）を相補的に使うことでそこから解決策が見出されることを指摘した。ただし、木村の考察では最終的に発出論に至る恐れがあるという問題も明らかになったため、それを解決する方策として中井の目的なき合目的性の必要性を提起した。

最後に本稿の可能性としての課題、木村と中井の師である田辺が最晩年に『マラルメ覚書』（一九六一年）、またそれに先立つ一九五一年に『ヴァレリーの芸術哲学』を執筆していることについて考えたい。そもそも数理哲学者ともされる田辺がなぜ詩を、しかも難解の極みとされるマラルメを論じ得るのか。ここで手がかりとなるのがマラルメの影響を強く受けつつ、師のマラルメより明快とされるヴァレリーの「美的無限」に関する論考である（荒木亨はこの美的無限という言葉を「彼の詩論において最も基本的で、最も重要な概念と見做す」⁷⁰と述べている）。ヴァレリーはこの美的無限について、「無限というこの語を正当化し、それにある明確な意味をあたえるためには、この秩序内では満足感が必要を蘇らせ、答が問を再生させ、不在が現存を、所有が欲求を産むということを想い起こせば充分です。それに対して、私が実用的秩序と名づけたところでは、目標が到達されると、行為の感覚的動機はすべて消失し、その持続すらいわば吸い取られて、抽象的で力のない思い出を残すにすぎないのです」⁷¹という。

ここでヴァレリーが否定的にのべる実用的秩序が本稿のアガベにおける完結性（もしくはカントの警告した統制原理の発出・実体化）の問題とみなすことができる。一方、肯定する美的無限はエロスとアガベの連関を述べていると考えることができる。なぜなら答が問を生み出すという永久往復運動⁷²は、木村の「完成への永遠の過程であるが、個々に於ては完結してゐる」というエロス

とアガベの相補性と軌を一にすると考えることができるからである。このようにマラルメに影響を受けたヴァレリーの「美的無限」から田辺のマラルメ論へと至る可能性のあることを指摘し、それを明らかにすることを今後の課題の一つとしたい。なお田辺の難解な『マラルメ覚書』への数少ない論攷が、偶然性の問題の議論に終始しているが、美的無限の問題が論じられないと仮にするならば、その理由も考察に価する。また『ヴァレリーの芸術哲学』も難解で、なおかつ、戦後の田辺がそれ以前の自己の立場を否定的に発展させた懺悔道哲学とも相関すると言われる⁷³。これらも美的無限の問題が論じられないと仮にするならば、その理由も考察に価する。それらの作業によって、西田、田辺、木村、三木、そして中井の距離の近さと相互の違いを測れて、京都学派の全体の見取り図のなかで中井を見ることが可能になると考えている。

註

- ¹ 西田幾多郎門下で西田の勧めで広島文理科大学哲学講師（のち助教授）、その後西田の進言もあって京都帝国大学で教育学教授法講座を担当（木村素衛、表現愛、こぶし書房、1997、p.235-236.）。
- ² 木村素衛、教育学の根本問題、黎明書房、1947、p.58.
- ³ 木村素衛、教育学の根本問題、黎明書房、1947、p.58.
- ⁴ 三木清、人生論ノート、岩波書店、1966、p.248.、（三木清全集、第1巻）。
- ⁵ 三木清、哲学ノート、岩波書店、1966、p.473.、（三木清全集、第10巻）。
- ⁶ 三木清、人生論ノート、岩波書店、1966、p.248.、（三木清全集、第1巻）。
- ⁷ 前田博、木村素衛教授の生涯と業績、京都大学教育学部紀要、4、1958、p.41.
- ⁸ 宮村悠介、カントの理念論の歴史的背景—近代哲学におけるイデア論受容の一断面—、愛知教育大学研究報告 人文・社会科学編、65、2016、p.101.
- ⁹ イマヌエル・カント、木村素衛ほか訳、一般歴史考其他、岩波書店、1926.、（カント著作集、13）
- ¹⁰ 前田博、木村素衛教授の生涯と業績、京都大学教育学部紀要、4、1958、p.42.
大西正倫、木村素衛に関する文献・資料目録（上）、教育学部論集（佛教大学）、15、2004、p.147.
- ¹¹ 小田部胤久、木村素衛—「表現愛」の美学、講談社、2010、p.120.
- ¹² 木村を論じるとき、フィヒテとの関係性に注目する場

合もある。たしかに、木村の博士論文は『実践的存在の基礎構造－教育哲学の考察に向けられたるフィヒテ哲学の一つの研究』であり、さらに木村はフィヒテの『全知識学の基礎』も翻訳している。矢野智司も、西田の「自覚」がフィヒテの事行概念に影響を受けており、西田と木村の師弟関係の側面を踏まえつつ、木村がフィヒテ研究者であったことが哲学から教育学への転回を可能にしたことを指摘している（矢野智司、京都学派と自覚の教育学、勁草書房、2021、p.380.）。しかし、そうであればこそ、フィヒテもカントを継いでいることを忘れることはできない。木村の『フィヒテ』では「カントの統制原理はかくして理論面へ向って低次的に射影された第三根本命題であると云うことができる」（木村素衛、フィヒテ、弘文堂書房、1937、p.76.、（西哲叢書、16.））という言葉が見られ、『表現愛』所収の「意志と行為」においても統制的／構成的原理に言及しつつ「カントの抽象的立場を出でて一層具體的に」（木村素衛、表現愛、岩波書店、1939、p.185-187.）と述べている。つまり、木村のフィヒテ研究もまたカント研究が下敷きとしてあったといえることができ、その意味で本稿において木村とカントの関係性に注目することに意義があるといえることができる。

¹³ カント、篠田英雄訳、純粋理性批判（中）、岩波書店、1961、p.307.

¹⁴ カント、篠田英雄訳、純粋理性批判（中）、岩波書店、1961、p.307.

¹⁵ カント、宇都宮芳明訳、永遠平和のために、岩波書店、2005、p.111.

¹⁶ カント、篠田英雄訳、純粋理性批判（中）、岩波書店、1961、p.324.

¹⁷ 統制的原理が中井を読み解く上で重要であると指摘したのは後藤嘉宏である（後藤嘉宏、「中井正一「委員会の論理」(1936)における嘘言の媒介について、情報メディア研究、16（1）、2018、p.58.）。

本研究はその提起を受け止め、さらに統制的原理（それと対をなす構成的原理）は中井だけでなく京都学派においても要点になることを含意させた。

¹⁸ 木村素衛、教育学の根本問題、黎明書房、1947、p.53.、（精神科学選書、2.）。

¹⁹ 木村素衛、教育学の根本問題、黎明書房、1947、p.36.、（精神科学選書、2.）。

²⁰ 小田部も「カント的な意味における「当為」の構造に等しい」（小田部胤久、木村素衛－「表現愛」の美学、講談社、2010、p.100.）と述べる。

²¹ 木村はこれを親鸞の悪人正機という意味で使っている（木村素衛、教育学の根本問題、黎明書房、1947、p.37.）。

²² 木村素衛、教育学の根本問題、黎明書房、1947、p.37.

²³ 木村素衛、独逸観念論の研究、弘文堂書房、1947、p.120.

²⁴ 木村素衛、独逸観念論の研究、弘文堂書房、1947、p.129.

²⁵ 中井はこれを抽象説（中井正一、機能概念の美学への寄与、美術出版社、1981、p.162.、（中井正一全集、第1巻.））や抽象的実体（中井正一、機能概念の美学への寄与、美術出版社、1981、p.83.、（中井正一全集、第1巻.））と表現しているが、これはカントの警告した統制的原理に基づく理念の実体化、つまり抽象的普遍の実体化のことである。よって抽象的普遍と抽象的実体の思考プロセスは同じであり、違いは普遍概念を実体化するか否かという点にある。

²⁶ 中井正一、機能概念の美学への寄与、美術出版社、1981、p.162.、（中井正一全集、第1巻.）。

²⁷ これは姫路大学教育学部学術教育研究会（2022年7月27日）での発表「機能概念の教育学への寄与」で報告した内容の一部である。

²⁸ 木村素衛、独逸観念論の研究、弘文堂書房、1947、p.130.

²⁹ 中井正一、機能概念の美学への寄与、美術出版社、1981、p.167.、（中井正一全集、第1巻.）。

³⁰ 木村素衛、独逸観念論の研究、弘文堂書房、1947、p.153-161.

³¹ カントは図式論を三角形（様々な形の三角形を＜三角形＞として理解できること）や犬の事例で説明している（カント、篠田英雄訳、純粋理性批判（上）、岩波書店、1961、p.218.）。また三木もそれを踏まえて、『構想力の論理』で犬の事例で説明している（三木清、構想力の論理、岩波書店、1967、p.380.、（三木清全集、第8巻.））。なお田辺も参考とした（田邊元、田邊元全集第3巻、筑摩書房、1963、p.246.）。

さらに本稿の図式論の説明には田中久文も参考にしている（田中久文、構想力と形－三木清のカント解釈をめぐる、精神科学、日本大学哲学研究室、(32)、p.120.）。

³² カントの統制的原理の肯定と構成的原理の否定、それに対するヘーゲルの構成的原理の肯定と具体的普遍の関係については竹内良知も指摘している（竹内良知、三木清論 VII 個性の問題（下）、第三文明(197)、1977、p.98.）。

³³ 木村素衛、教育学の根本問題、黎明書房、1947、p.38.

³⁴ 統制的原理と抽象的普遍、構成的原理と具体的普遍の結びつきについては三木にも読み取れる（三木清、

個性の問題. 岩波書店, 1966, p.134., (三木清全集, 第2巻).).

³⁵ 三木清. 個性の問題. 岩波書店, 1966, p.134., (三木清全集, 第2巻).

³⁶ 木村素衛. 教育学の根本問題. 黎明書房, 1947, p.45.

³⁷ 木村素衛. 教育学の根本問題. 黎明書房, 1947, p.54.

³⁸ 中井は「発出的な実体性」(中井正一. 機能概念の美学への寄与. 美術出版社, 1981, p.62., (中井正一全集, 第1巻).)と述べたあとに、ピストルの弾の例を用いて実体概念を説明している。

ここで概念を整理すると、抽象的普遍が統制的原理(未完結性)、具体的普遍が構成的原理(完結性)を意味する。抽象的普遍と抽象的実体は思考プロセスが途中までは同じだが最後の実体化をするか否かで違いがあり、抽象的実体と具体的普遍は思考プロセスが異なるが最後の実体化は同じであるということになる。当然、抽象的普遍と具体的普遍はそもそも思考プロセスが異なる。

ここで試論的に想起される手法がマトリックス化である。抽象的普遍と抽象的実体、そして具体的普遍があるのであれば、具体的実体概念があってもおかしくはない。つまり発出論としての具体的普遍(具体的実体概念)があるのであれば、発出論でない具体的普遍もあるという考え方を導きだすことができるのであり、このような考え方があったからヘーゲルを肯定する観点が中井や木村にあったといえるかもしれない。

³⁹ 中井正一. 委員会の論理. 美術出版社, 1981, p.62., (中井正一全集, 第1巻).

⁴⁰ 木村素衛. 美のかたち. 岩波書店, 1941, p.229.

⁴¹ 小田部胤久. 木村素衛－「表現愛」の美学. 講談社, 2010, p.38.

⁴² 木村素衛. 美のかたち. 岩波書店, 1941, p.242.

⁴³ 岩城見一. “ドイツ観念論の美学”. 岩波哲学・思想事典. 廣松渉ほか編. 岩波書店, 1998, p.1308.,

⁴⁴ 木村素衛. 教育学の根本問題. 黎明書房, 1947, p.42.

⁴⁵ 木村素衛. 教育学の根本問題. 黎明書房, 1947, p.45.

⁴⁶ 小田部胤久. 木村素衛－「表現愛」の美学. 講談社, 2010, p.120.

⁴⁷ 木村素衛. 教育学の根本問題. 黎明書房, 1947, p.58.

⁴⁸ 木村素衛. 教育学の根本問題. 黎明書房, 1947, p.49.

⁴⁹ 木村素衛. 教育学の根本問題. 黎明書房, 1947, p.48.

⁵⁰ 小田部胤久. 木村素衛－「表現愛」の美学. 講談社, 2010, p.157.

⁵¹ 小田部胤久. 木村素衛－「表現愛」の美学. 講談社,

2010, p.158.

⁵² 辻村公一. 解説 田辺哲学について. 筑摩書房 1965, p.33., (現代日本思想大系, 23).

⁵³ 辻村公一. 解説 田辺哲学について. 筑摩書房 1965, p.35., (現代日本思想大系, 23).

⁵⁴ 辻村公一. 解説 田辺哲学について. 筑摩書房 1965, p.37., (現代日本思想大系, 23).

⁵⁵ 小田部胤久. 木村素衛－「表現愛」の美学. 講談社, 2010, p.120.

⁵⁶ 岸本英夫. 死を見つめる心. 講談社, 1973, p.144.

⁵⁷ 小田部胤久. 木村素衛－「表現愛」の美学. 講談社, 2010, p.159.

⁵⁸ 想像に過ぎないが恐らくこれは西田という師への感謝、尊崇の念のせいではないかとも思われる。師と同じ言葉を使えること、師に連なろうとする意識、それは研究における喜びの一つである。しかしその尊崇の念の対象は木村に二つあった。そしてもう一人の師である田辺の思想は西田との対立によって彫琢されたものである。結果として理論(田辺)と表現(西田)の矛盾として表現されてしまったということはないだろうか。または師の対立を弟子として調停しようとしたとも考えることもできる。結果としてそれが読者には発出的傾向を示すサインとなってしまったということにはならないだろうか。以上のことを傍証するように、村瀬は次のように述べている。「絶対無」の自己限定について語られた最後の部分にどれほどの積極的意義が残されているのかは判然としない。なおこのことと関連すると思われるが、西田哲学において多用されていた「即」の論理が木村哲学にあっては大幅に後景に退き、代わって「媒介」の論理が顕著に前景を支配していることも、この際特に注目されなければならないであろう。少なくともエロスの向上愛の局面に関する限り、否定的媒介の論理に貫かれた自己発展の様相こそが関心の対象とされているのである。その意味では、木村は西田に比べてはるかに過程(筆者: 漸進)性を重視した」(村瀬裕也. 木村素衛の哲学: 美と教養への啓示. こぶし書房, 2001, p.196.)。

⁵⁹ 中井正一. 機能概念の美学への寄与. 美術出版社, 1981, p.183., (中井正一全集, 第1巻).

⁶⁰ 木村素衛. 美のかたち. 岩波書店, 1941, p.172.

⁶¹ 河本英夫. 自然の解釈学: ゲーテ自然学再考. 海鳴社, 1984, p.28.

⁶² 河本英夫. 自然の解釈学: ゲーテ自然学再考. 海鳴社, 1984, p.28.

- ⁶³ 三木清. 世界文芸大辞典. 岩波書店, 1966, p.334., (三木清全集, 第12巻).
- ⁶⁴ 中井正一. 回顧十年. 美術出版社, 1981, p.355., (中井正一全集, 第1巻).
- ⁶⁵ 「田辺君の議論は精密だが抽象的にて何だかいつまでもカント認識論の立場をはなれない」(西田幾多郎. 西田幾多郎書簡集. 岩波書店, 2020, p.184.).
- ⁶⁶ 「真の弁証法に到るには、ヘーゲルの弁証法をカントの立場に引き戻すのではなくして、寧ろヘーゲルの立場を徹底すべきでないかと思ふ」(西田幾多郎. 西田幾多郎全集 第8巻. 岩波書店, 2003, p.556.).
- ⁶⁷ 田邊元. カントの目的論. 筑摩書房, 1963, p.3., (田邊元全集, 第3巻).
- ⁶⁸ 田邊元. カントの目的論. 筑摩書房, 1963, p.4., (田邊元全集, 第3巻).
- ⁶⁹ 中井正一. 回顧十年. 美術出版社, 1981, p.350., (中井正一全集, 第1巻).
- ⁷⁰ 荒木亨. “仏英詩の批評とヴァレリーの詩論”. 比較文学比較文化: 島田謹二教授還暦記念論文集. 弘文堂, 1961, p.56.,
- ⁷¹ ヴァレリー, 清水徹訳. 芸術についての考察. 人文

書院, 1966, p.437., (ヴァリエテ, 第2).

- ⁷² 荒木亨. “仏英詩の批評とヴァレリーの詩論”. 比較文学比較文化: 島田謹二教授還暦記念論文集. 弘文堂, 1961, p.57. なお、本稿の第二著者後藤は以下の時点で荒木の論攷を見落としていたが、慶應義塾大学文学部仏文専攻の1982年度卒業論文でヴァレリーの「歩み」という詩を分析し、「美的無限」に通じる問題を論じている（「Paul Valéry の *Les Charmes* における *Les Pas* と *La Ceinture* の間隙」未公開。タイトルのみ『藝文研究』（慶應義塾大学藝文学会）45の「彙報」に掲載）。
- ⁷³ 廖欽彬. 田邊元の芸術論. 比較思想研究, (34), 2007. この論文では田邊自身の種の論理の個、種、類と Valéry との近接性との田邊自身の指摘は書かれるが、「美的無限」には触れられない。また他力本願、易行道の観点から Valéry が「制作即救済」になっていないと田邊は批判するが、廖欽彬に言わせると、田邊の文章の理解こそが、難行道でないのかと、皮肉る。

(令和5年9月29日受付)

(令和5年11月22日採録)